

埼玉育ちのグローバル人

アメリカ南部で日本の種をまく

第2回 「外国から習い、日本を学ぶ」

JOI (Japan Outreach Initiative) プログラム 日米草の根交流コーディネーター

村田 彩さん



埼玉県マスコット「コバトン」



皆さん、こんにちは。第二回目は、私の国際交流への興味が、大学生活や仕事の中で実際にどのような活動に繋がり、最終的に現在のアメリカでの日米草の根交流を始めるきっかけとなったかについて紹介したいと思います。

ラオスコffeeー 農家視察からcoffee販売へー

ニュージーランド留学から帰国後、大学3年生の時、私は都内のいくつかの大学の学生が主体で行うフェアトレード団体に参加をしました。当時、貿易に関してほぼ知識のなかった私ですが、フェアトレードの「発展途上国の生産者と先進国の消費者を繋ぐ」という考え方に興味を持つと共に、大学生としていかに様々な形で国際交流に関わることが出来るかを模索していた中で始めた活動でした。

一番記憶に残っている出来事は、ラオスのcoffee生産に精通している大学関係者が企画したラオスのcoffee農家を訪れるツアーに参加したことです。初めてラオスという国を訪れ（首都のビエンチャンではなく農村地域）、私の日本での生活とは大きく異なる彼らの生活様式を知り、彼らが直面するcoffee生産・輸出の実態は、自分で実際に見聞きしなければ簡単に理解出来るものではないとさえ感じました。庭で駆け回る鶏を夕食のために調理したり、携帯電話やパソコンに頼らない生活を送る彼らの姿を近くで見て、大きな刺激を受けると共に、家族全員が一体となり支え合う

温かな国民性に大変惹かれました。日本では、カフェやコンビニで当たり前目にするcoffeeが、どのような人々によって作られ、私たちの消費活動と彼らの生活がいかに繋がっているのかなど、以前はあまり深く意識していなかったことを改めて考えさせられました。



インタビューをしたcoffee農家のご家族

その後、彼らのcoffeeを日本に輸入し、商品化後、都内のカフェやイベントを通し販売するプロジェクトを行いました。このプロジェクトは他大学の学生と共に行った約一年に及ぶプロジェクトで、多くの苦勞がありましたがフェアトレードのやりがいや面白みを感じることができ、苦勞以上の達成感を味わえた貴重な体験でした。

また、一緒に活動した仲間からの刺激も大きかったです。同年代にも関わらず、他の大学生たちは、世界が直面する問題に目を向け、それに対し働きかけをする様子を見て「私には何が出来るだろう」と真剣に考え始めました。



帰国前日、ラオスの伝統的な安全祈願の儀式をしていただいた様子

将来を担うグローバルな若者たち-国際協力を学ぶ-

大学4年生の夏、明治大学と立教大学(母校)が主催した国際協力について学ぶサマーキャンプに参加しました。プロジェクトが開催された新潟県にある国際大学(International University of Japan)は、各国政府から派遣された大学院生や政府機関関係者が国際協力について学ぶ大変国際色豊かな現場でした。私は2大学から選抜された学生の一人として、国際協力に関する講義を受講し、グローバルリーダーを育てるための英語プログラムに参加しました。

カンボジアやインドネシアなど各国からの大学院生のサポートを受ける中、彼らの国が抱える課題や日本との関わりについて話を聞いたことは、外交そして政府間が支援する人的交流の仕組みにも興味を持つきっかけとなりました。しかし、それ以上に、彼らと今でも連絡を取り合う関係が築けたことは私の人生の宝の一つです。



サマープログラム参加者との集合写真

このように、実際に様々な国・文化の人と交わ

り意見を交換する中で、相手に対してより興味・好感を持って接することの重要性、そうすることで繋がる輪があることを知ることが出来たことで、改めて草の根レベルでの国際交流の大切さを学びました。そして、大学卒業後は、人とコミュニケーションをとることが好きな自身の性格を活かし国際交流に関わることが出来る現場の一つとして、ホテルへの就職を決めました。

外国人観光客をおもてなし-ホテルで働く-

私が勤務した都内のホテルは、元旅館という特色を活かし、日本的な雰囲気味わえることが国内外のゲストに人気のホテルでした。日本的なインテリアや日本庭園に加え、季節ごとのイベント開催を通し、日本人や外国人に関わらず日本の「美」を楽しめる機会が多くありました。

特に、私は海外ゲストに対し、懐石料理を通して日本の食や季節感を伝えたり、日本各地の観光情報を提供したりすることにとどまらず、彼らが街を歩いて発見した日本のユニークさや疑問点について話を聞き、自分なりの意見を相手に伝えてコミュニケーションをとることに大変やりがいを感じました。というのも、彼らが日本に興味を持ち実際に日本を訪れてくれることに感謝をすると共に、日本人や日本文化についてより深い理解を持ち、日本で得た経験を家族や友人と共有してもらうことで、日本と外国を結ぶ一つのきっかけになると思ったからです。



勤務していたホテルの日本庭園

ホテルでの仕事を通し、日本について一方的に伝えるのではなく、まずは相手が何を求めている、何について知りたいのかを常に意識することで、

以前とは違った視点から自国について考えるようになりました。また、外国人観光客を通し、改めて「日本の良さ」とは何か気付くことが出来ました。

日本は世界にも誇れる美しい文化・自然があり、日本政府としても、観光が今後より一層日本経済の成長を支える柱となることを期待し力を入れています。そして、日本への観光客数もここ数年で急激に伸びています。その波をホテルの仕事を通し肌で実感する中、次第にまだ日本を知らない人へ何かアプローチが出来ないだろうか考えるようになりました。そこで出会ったのが、「日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム」でした。

自分への挑戦

独立行政法人国際交流基金日米センターと米国非営利団体ローラシアン協会が共同実施するこのプログラムは、日本人コーディネーターが2年間に渡りアメリカにて草の根レベルで日米交流を深めることを目的としています。私は、海外での日本への関心を高めるだけではなく、日本のことを伝えることでより多くの人々が文化の多様性を享受し交流が進むことを願い、このプログラムへの応募を決意しました。

小学生時代に初めて外国文化に興味を持ち、その後も多くの人々の支えがあり、私は多文化交流の楽しさ・大切さを学んできました。今度は、自身が学んだことを通し、より多くの子どもたちが自分たちの国そして世界に目を向けられるよう、新たなフィールドで活動することは、自身への大きな挑戦となっています。

次回、最終回では、現在のアメリカでの活動の様子を紹介すると共に、1年目で経験した苦労ややりがい、そして残り1年でやり遂げたい目標についてお話ししたいと思います。

(最終号につづく)